

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 祁 建 民

本論文は、中国華北の農村社会を対象として、村落社会の社会結合の構造的な様態とその歴史的な変容過程について、利用可能な長期間にわたる具体的な調査資料に即して分析し、そうした作業を通じて華北農村にみられる国家権力と村落社会との関係の特質を明らかにし、さらに中国農村の社会的・歴史的な視角を展望しようとした力作である。

中国の国家と社会に関する従来の研究史には、巨大な官僚制に支えられる大規模な国家機構と、相対的に社会の基層にあって自律的な秩序を有していたとされる村落社会との並存という重層的な社会構造を想定し、国家権力と村落社会を二元的なものとして捉える見方が存在してきた。このような観点からすると、強力な国家権力のもとでは、村落社会はうえからの抑圧的な力によって整序されて自律的な力を弱め、逆に村落社会の力が強い場合には国家権力は社会の末端に及ぶことなく、国家は分裂への傾向を示し弱体化するという図式的な理解を生むこととなる。例えば、中国の専制的で巨大な国家権力の基礎は、孤立分散的な村落共同体の存在にあったとする見解は、従来の研究史における一つの典型であった。

こうした図式的理解とは異なる先行研究においても、専制国家の官僚システムやイデオロギーの面から社会構造に接近しようとする方法と、宗族や共同体といった基層社会集団の構造・機能の側面を重視して国家権力から相対的に離れた空間を想定しようとする方法などが存在しており、この双方向の交差する領域については、なお十分な分析が加えられてきたとはいえない。本論文の著者は、こうした先行研究を批判的に総括し、国家と社会の接点を改めて構造的に明らかにしようとして企図して、本論文を構想したといえる。

かつて日本による華北支配が行なわれていたころ、満鉄調査部などを中心として、華北農村に対する大規模な農村慣行調査が実施され、膨大な調査資料が残された。その後、中国には社会主義国家が建国され、学術的な農村調査の条件は制約されたが、戦前日本の調査から半世紀を経て、1980～90年代以降には、かつての調査村落に対する再調査が可能となり、中国内外の研究者による再調査の試みを実施されるようになった。本論文の筆者もそうした華北農村に対する再調査の企画に参加し、本論文の主要な資料の根拠を実地に採集する機会を得るとともに、華北農村の社会結合の歴史的な変遷および現状の把握に関して、独自の分析成果と判断を形成するに至った。本論文は、そのような成果をまとめたものにほかならない。

本論文は、第一章で研究課題の設定と先行研究の整理を行なったのち、戦前の慣行調査に依拠した第一部（第二章・第三章）および1990年代の再調査の成果を利用した第二部（第四章・第五章・第六章・第七章）によって構成される。各章の内容の概略を述べると、第二章では、華北農村に及ぼされる国家権力の様態と農民の国家に対する意識を検討し、第三章では、華北農村の社会結合について、宗族組織、地縁的な村落集団の様態、民間信仰による社会結合、農耕および日常行事に由来する互助的な諸関係という四つの側面から、華北の村落に存在した社会結合の構造とその変容を分析する。

第二部の四つの章では、人民共和国建国以後の華北農村がたどった変遷のあとが、時期に従って具体的に検討される。まず第四章では、1950年代の土地改革と集団化が村落に与えた影響が考察され、第五章では1960年代の「四清運動」から「文化大革命」にかけての時期の国家権力と村落社会の相互作用が考察され、第六章では文革が終結し「開放・改革」政策が進められて以後の華北農村について、とくに再調査が行なわれた1990年代の状況に即して分析が加えられる。

第七章は、第二部の結論を述べる部分であるとともに、本論文の全体に関する結論ともなっており、そこでは以下のような総括と展望が展開されている。すなわち、華北農村は村落の内部に宗族・地縁・信仰・共同作業など多様な社会的結合が混在しながら、共同体的な関係や強力な支配関係は存在せず、国家権力に対抗しようとするような自律的なシステムを欠いていた、他方、国家権力が村落社会に浸透する経路は組織的なものというよりも個人的な利益を媒介にした個別的な経路を通じてなされ、そのためには村落内部の多様な社会結合がさまざまに利用されることとなった、とする。

以上の分析をふまえて、本論文の筆者は、本論文の結論として、中国華北の村落社会は国家権力の介入をまって社会結合の強化を実現する受動的な傾向を有しており、他方、国家権力は村落の個別的な社会結合に依存し、それらを利用して村落への統制を現実化する、という相互依存関係が存在しているという。人民共和国建国以後を対象とした第二部において、筆者は再調査資料の具体的なデータから、このような相互依存関係が、国家の農村政策の変転にもかかわらず、それぞれの時期において、さまざまなかたちで現れたことを明らかにしており、この点は本論文の重要な貢献であると評価される。

なお、本論文には、いくつかの弱点も指摘される。論文審査に際して審査委員からは、国家権力と村落社会の接点を問題とする本論文の課題に接近するためには、村落の社会結合を分析対象とするだけでなく、地方政府を構成する複雑な行政機構の存在形態やその変容について、もっと分析を加えるべきではないかという意見、また、筆者が直接に一次資料に基づいて議論しているのは、満鉄調査の対象であったいくつかの農村についてのデータによるところが主要なものであり、そのような限定的な作業によって広く華北農村、さらには中国農村を議論しようとするには、留保が必要ではないか、などの疑問が提起された。

このような点には、なお議論を深める余地は認められるものの、これらの点は本研究の価値と学界への貢献を減ずるものではなく、さらに、1990年代に行われた華北農村再調査による膨大な資料を全面的に利用した研究として、本論文は最初の規模の大きな業績の一つであると評価される。したがって、本審査委員会は「博士（学術）」の学位を授与するにふさわしいものと認定する。